

2009

鳥取環境大学

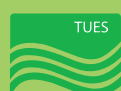
第6回全国高校生

環境論文TUESカップ

論文報告書

テーマ

「20年後の環境問題—どうなる、どうする—」



鳥取環境大学

T U E S C U P 2 0 0 9



鳥取環境大学学長

古澤 巖

—刊行によせて—

我々人類は地球温暖化をはじめ、食料、エネルギー、水問題など解決しなければならない複雑で多様化した問題に直面しています。また、鳩山総理は国連で温暖化ガス排出削減に具体的な数値を上げ、地球温暖化問題に日本の政府も積極的な行動をとることを明らかにしています。

このような状況の中でこれからの日本を担う現代の高校生が環境問題をどのように考えているのかを知るため「20年後の環境問題—どうなる、どうする」というテーマで全国高校生環境論文を募集致しましたところ、29都道府県、55の高校から1,492作品の応募がありました。

今回はテーマが20年後の地球の姿を予測することになっており、論文作成には苦勞されたかと思えます。しかし、このような中で多くの作品が、環境問題をしっかりと受け止め、現状を認識し、そして未来への関わりについての心構えがしっかりと書かれているのが見られ、大変心強く感じました。紙面の都合上、本報告書には入賞作品しか掲載できませんでしたが、1,500にも及ぶこれらの多彩な作品は我々に多くの感銘を与えてくれました。

本学は今後もこの論文募集事業を通して、本学の建学理念である「人と社会と自然との共生」の実現に貢献する有為な人材の育成と創造的な学術研究を行うことで、その使命を果たしていく所存です。

最後になりましたが、本事業に応募して頂いた高校生の皆さんや指導に当たって頂いた教員の皆様をはじめ、ご支援ご協力頂いた方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

I	第6回全国高校生環境論文TUESカップ Report	
1	論文募集	2
2	審査	2
3	表彰	3
4	入賞論文発表会と環境映画上映会	4
II	入賞作品の紹介	
	環境大賞	
	「地球は青かった」	
	岐阜県立岐山高等学校 3年 石田 明子	5
	鳥取県知事賞	
	「美しい海は私たちの手で取り戻したい」	
	山陽女子高等学校 1年 桑名美起子	7
	鳥取市長賞	
	「迷う私達とツバル」	
	鳥取県立鳥取東高等学校 2年 井上 雄二	9
	新日本海新聞社賞	
	「今、私にできること」	
	大阪府立農芸高等学校 3年 不動 緑	11
	佳作	
	「農業生産物に見る20年後の環境問題」	
	兵庫県立長田高等学校 1年 安藤 竜介	13
	「20年後からの救難信号」	
	兵庫県立三木北高等学校 2年 小嶋 啓太	15
	「どうする、人類」	
	兵庫県立西脇工業高等学校 1年 山川のどか	17
III	応募高等学校一覧	19
IV	過去の賞歴	20

I 第6回全国高校生環境論文

TUES[※]カップ Report

※TUES = 鳥取環境大学 (Tottori University of Environmental Studies の略)

1. 論文募集

地球環境問題について、次世代を担う高校生の意見を論文として作成・発表してもらうことを目的に、全国高校生環境論文「20年後の環境問題—どうなる、どうする—」を下記の通り募集しました。

- 1) テーマ 「20年後の環境問題—どうなる、どうする—」
テーマをもとに、自由な視点から論文作成。
- 2) 応募資格 日本の高校に在学している高校生（国籍不問）
- 3) 応募内容 応募は1人1作品。日本語で書かれた未発表のものに限る。
論文は、原稿用紙（400字詰め）又はA4版用紙（書式；30字×40行）
を使用。字数は2,000字以上3,000字以内。
- 4) 応募期限 平成21年9月4日（金）（当日消印有効）

2. 審査

応募件数 1,492作品（29道府県、55校）※参加校はP19のとおり
審査は、学外委員及び本学教員で構成する論文審査委員会が実施しました。

審査委員長	学 長	古澤 巖
審査委員(学外)	鳥 取 県 鳥 取 市 株式会社新日本海新聞社	
(学内)副 学 長		岡崎 誠
環境政策経営学科	学科長	金子 弘道
環境政策経営学科	教 授	細野 宏
環境政策経営学科	准教授	西村 教子
環境マネジメント学科	学科長	小林 朋道
環境マネジメント学科	教 授	木俣 信行
環境マネジメント学科	准教授	荒田 鉄二
建築・環境デザイン学科	学科長	中村 貴志
建築・環境デザイン学科	准教授	遠藤由美子
建築・環境デザイン学科	准教授	中治 弘行
情報システム学科	学科長	秦野 諭示
情報システム学科	教 授	実森 彰郎
情報システム学科	助 教	名古屋孝幸

3. 表 彰

1) 環 境 大 賞 ……………トロフィー 賞状 図書カード 10万円

「地球は青かった」

岐阜県立岐山高等学校 3年 石 田 明 子

2) 鳥 取 県 知 事 賞 ……………トロフィー 賞状 図書カード 5万円

「美しい海は私たちの手で取り戻したい」

山陽女子高等学校 1年 桑 名 美起子

3) 鳥 取 市 長 賞 ……………トロフィー 賞状 図書カード 5万円

「迷う私達とツバル」

鳥取県立鳥取東高等学校 2年 井 上 雄 二

4) 新日本海新聞社賞 ……………トロフィー 賞状 図書カード 5万円

「今、私にできること」

大阪府立農芸高等学校 3年 不 動 緑

5) 佳 作 ……………賞状 図書カード 2万円

「20年後からの救難信号」 兵庫県立三木北高等学校 2年 小 嶋 啓 太

「農業生産物に見る20年後の環境問題」 兵庫県立長田高等学校 1年 安 藤 竜 介

「どうする、人類」 兵庫県立西脇工業高等学校 1年 山 川 のどか

6) 学 校 賞 ……………賞状 図書カード 3万円 (応募件数の上位3校)

鳥取県立鳥取東高等学校 鳥取県

大阪市立淀商業高等学校 大阪府

都城工業高等専門学校 宮崎県

7) 奨 励 賞 ……………賞状 図書カード 1万円

(上記以外で応募数10作品以上の高校)

大阪府立富田林高等学校 大阪府 福岡県立北筑高等学校 福岡県

島根県立津和野高等学校 島根県 神戸学院大学附属高等学校 兵庫県

埼玉県立いずみ高等学校 埼玉県 育英西高等学校 奈良県

済美高等学校 愛媛県 兵庫県立長田高等学校 兵庫県

京都府立西舞鶴高等学校 京都府 開星高等学校 島根県

4. 第6回全国高校生環境論文入賞論文発表会と環境映画上映会

地球環境問題について、高校生の意見を発表してもらうことを目的に、全国高校生環境論文「20年後の環境問題—どうなる、どうする—」を募集した結果、全国から1,492件の応募がありました。そして、学内外委員による厳正な審査を経て入選作品が選出され、10月11日（日）には「第6回全国高校生環境論文TUESカップ論文発表会・表彰式」と環境映画上映会が行われ、多数の方が来場、盛会裏に終了しました。

第1部 論文発表会・表彰式

受賞者の4名が受賞論文について発表を行いました。

①環境大賞 「地球は青かった」

岐阜県立岐山高等学校 3年 石田 明子さん

石田さんは、森林破壊、砂漠化などの環境破壊が進む地球を、白地図に塗り絵をしていくユニークな発想で表現し、緑と青で描ける美しい地球を取り戻すために、私たちは今から環境保護に取り組まなければならないと訴えました。



②鳥取県知事賞 「美しい海は私たちの手で取り戻したい」

山陽女子高等学校 1年 桑名 美起子さん

自身が高校で取り組む瀬戸内海の海底ごみ問題について。瀬戸内海の海底ごみの多くは内陸部から発生したごみで、目視で確認ができないため回収が困難。海底ごみの発生源を多くの人に知ってもらうことが海ごみ問題の解決策の一つであると訴えました。

③鳥取市長賞 「迷う私達とツバル」

鳥取県立鳥取東高等学校 2年 井上 雄二さん

地球温暖化により海面上昇が進み水没の危機にある島国ツバルを題材に、地球温暖化などの環境問題を知りながらも、行動を起こすことに迷っている私たちが、迷いを断ち切り行動を起こすことが重要な課題であると訴えました。

④新日本海新聞社賞 「今、私にできること」

大阪府立農芸高等学校 3年 不動 緑さん

農業高校に通う自身が植物に出会ったことで、農業を学ぶことは環境を守ることに繋がることを知り、保育園で園児と一緒にひまわりを育てている自身の活動を通じて、森林保護の重要性を訴えました。



続いて、1,492作品のなかから選ばれた個人賞7作品と学校賞の3高校に、古澤学長、法橋鳥取県生活環境部長、深澤鳥取市副市長、田中新日本海新聞社営業局長より、賞状・トロフィー・副賞が贈られ、各賞を受賞したそれぞれの作品について講評を頂きました。

第2部 環境映画「earth (アース)」上映会 (主催：鳥取環境大学学生NPO CrossRing)

第2部は、本学学生団体「学生NPO CrossRing」主催により環境映画上映会が行われました。上映映画は神秘と美しさに溢れる地球を舞台にした「earth (アース)」。危機に瀕している地球の現在を多くの方に受け止めてもらうため大きなきっかけになりました。

【平成21年度鳥取県環境立県協働促進事業補助金採択事業】



II 入賞作品の紹介

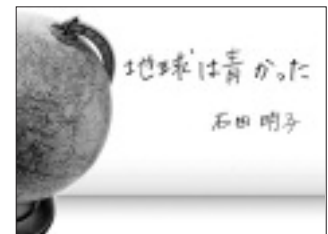


地球は青かった

岐阜県立岐山高等学校 3年 石田 明子



「地球を描いてください。」と言われたら、あなたは何色の色鉛筆を持つだろうか。たいいていの人の地球は青と緑の2色があれば完成してしまうだろう。豊かな緑と豊かな水の星、それは地球である。皆がそれを信じて疑わず、地球は美しいのだと確信している。これだけ世間で環境問題が叫ばれていようと、人間の地球は依然として青と緑の美しい地球なのだ。果たして実際、地球はどんな色をしているのだろうか。白地図に塗り絵をしていこう。



まず地球では海が約7割を占める。青が70%。ここまでは良い。問題は陸地だ。世界の森林面積は約39億ヘクタール、全陸地の面積はおよそ149億ヘクタールであるから、これは陸地の4分の1強にあたる。地球全体に対して考えると7.5%に過ぎない。緑が7.5%。さて、次に持つべきは…黄土色の色鉛筆だ。黄土色、つまり砂漠。地球上の砂漠の面積は約37億ヘクタールである。驚くことに森林面積と大して変わらず、陸地面積の4分の1ほどを占めている。黄土色も7.5%。あとは地図の上の方と下の方の氷を白で塗って、都市に立ち並ぶビルの塊を灰色で塗って、田や畑や草原を黄緑で塗って…なんてことをしていれば、あっという間に地球の出来上がりである。ど



うだろう、目の前の地図を見ると、さっきまで頭の中で輝いていた地球はどこかへ行ってしまったのではないだろうか。予想以上の緑の少なさと、予想以上の黄土色の多さの背景に、森林破壊と砂漠化という、二つの環境問題が関係していることは言うまでもないだろう。細かい部分を見ていけば、他にも人間の手によって塗りかえられた場所は、山程あるにちがいない。



さて、ここで次に焦点を当てたいのは20年後の地球である。今のまま環境破壊が進めば、20年後はどうなるのだろうか。もう一度白地図と色鉛筆を準備しよう。

まずは海だ。ここで考慮に入れたいのは地球温暖化という問題である。地球温暖化が原因で北極の氷が解けて白熊が…とか、海面上昇により小さな島が…なんて話は誰もが一度は耳にしたことがあるだろう。つまり20年後は今よりも海の面積は広いということになる。青を7割より多めに塗ろう。それに伴って白をひかえめに塗らなければならない。あと何年後かには、氷のない北極が見られるという残念な説もあり、また、標高の高い山々の頂上に何万年も残ってきた氷も各地で無くなろうとしている。さて、次は緑だ。森林は現在1秒につき0.41ヘクタール減少しているから、1年で730万ヘクタール、20年で1億4600万ヘクタールが減少するという計算になる。つまり20年後の森林面積は37億5400万ヘクタールだ。次に黄土色、すなわち砂漠の面積を考えよう。砂漠は1秒につき約0.19ヘクタール増加している。1年で約

600万ヘクタールだ。20年後には1億2000万増加して、38億2000万ヘクタールの砂漠になる。この計画から分かるように、このままいけば、砂漠の面積が森林面積よりも広がってしまう。今はかろうじて青と緑と黄土色の地球が、20年後には青と黄土色と緑の地球になってしまうわけだ。おそらく20年も経てば、現在の発展途上国も次々と開発され、灰色も目につくようになってくるだろう。そんな地球は美しいといえるのだろうか。

今出来上がった未来予想図は、あくまでも今このまま進行していった場合のものである。もしかしたら大気汚染がひどくなって紫か何かの気味の悪い煙でおおわれた地球になるかもしれないし、水質汚染がひどくなって海が全て真っ赤になるかもしれない。あるいは、技術の進歩で温室効果ガスを酸素に変える機械ができれば、人間は木を植えることをやめて、そこらじゅうにそれを置くだらう。そうすればきっと灰色の地球が生まれる。残り少ない資源を求めて国々が戦争を始めれば、きっと地球は丸こげになって何もなくなってしまいうだろう。もしも何かが起こって大気中の二酸化炭素濃度が爆発的に高くなれば、人間はバタバタ倒れ、植物は大喜び。そしてまた美しい、青と緑の地球にリセットかもしれない。予想しようと思えば、未来の地球はいくらでも想像できる。20年という地球にとってもほんの一瞬の間に、何が起きるか分からないほど、今の地球は不安定なのだ。

人間は生まれて以来着々と地球の色を塗りかえ、自分たちの住みやすいように模様替えをしてきた。そのうち人間は、ここが地球上に住む全ての生物の家だということも忘れてしまった。人間のせいで、どれだけ多くの生物が我慢してきたのだろうか。私達はこれから、我慢してもらった分だけ我慢して、地球を元に戻そうとしなければならない。所詮ちっぽけなことの積み重ねでここまで来たのだから、ちっぽけなことの積み重ねで元に戻るはずだ。地球上の人間全員が、一日1つ、地球のために何かをすれば、それは60億倍になって地球に注がれる。365日続ければ、2兆1900億倍、20年続ければ43兆8000億倍だ。もし、一日に2つ良いことをすれば、それが更に2倍。3つで3倍。4つで4倍。5つで5倍…もはや計算するのが嫌になるくらい膨大な数字になる。人間の影響力というのは恐ろしいほど強力なのだ。やはり、本当に小さなことでも良いから一人一人が動き出さなければならぬだろう。たった1人でも「自分の力なんて…」と思ってしまえば、効果は60億分の1だけ減ってしまう。逆に言えば、1人が一日1つ地球を壊すようなことをすれば、同じように何倍にもなって地球にダメージを与えることも忘れてはならない。

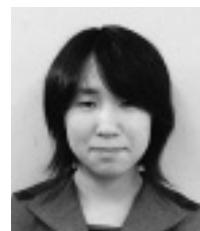
電気を小まめに消しましょう。使っていない家電のコンセントは抜きましょう。紙は大事に使いましょう。近くへの移動は自転車にしましょう。水をためて歯を磨きましょう。…今の世の中は地球に優しい言葉で溢れている。それを一人一人がきちんと受信して、実行し、継続しなければならない。そうしなければ、地球はどんどん壊れ、輝きを失っていく。ちなみに、もちろんそれは自分たちの首を、自分達で絞めているということでもある。大変だとか、面倒だとか、興味が無いだなんて思う余地など、どこにあるのだろうか。もう一度言うが、私達人間は、我慢させた分だけ我慢しなければならないのだ。



20年後、地球はどんな色をしているのだろうか。人間は美しい自然溢れる地球と「共生」できているのだろうか。人間も、美しい地球に住む、美しい生物の一種として存在することができているのだろうか。20年という時間はとても短い、20年間で始められないことは、100年経っても始められないだろう。「今週のうちの出来ることを来週までのぼしたって、どうせ来週もやらないぞ！そのうち手遅れになるぞ！」なんて言葉は、受験生の私にとって聞き飽きた言葉だ。私達は“今”始めなければならない。さて、20年後の地球はどんなに美しいだろうか。私は1枚の白地図と、青と緑の2本の色鉛筆だけを、大切にしまっておかなければならない。

美しい海は私たちの手で取り戻したい

山陽女子高等学校 1年 桑名 美起子



「これじゃ駄目だ。私達の手で美しい海を取り戻さなきゃ。」これは私が初めて瀬戸内海での海底ゴミの回収活動に参加した時に自然と出た最初の言葉であった。

私は高校の部活動で瀬戸内海の海底ゴミの回収活動に取り組んでいる。回収活動では、顧問の先生と部活の皆で漁船に乗り込み、瀬戸内海へ出航する。瀬戸内海は日本最大の内海であり、多島海であることから、美しい景観が広がっている。水面を見つめるとゴミ1つなく、本当にゴミが存在するのであろうかと疑ってしまう程澄んでいるのである。

海底ゴミの回収作業では漁船から底引き網を入れ、20分程度漁船を動かした後で網を上げるのである。網には魚介類がかかっているが、そこには目を見張る程の大量のゴミがかかっているのである。海底に網を入れた結果、美しい瀬戸内海の底には多くのゴミが堆積している衝撃の真実を知ったのである。

ゴミの大部分はビニールやプラスチックなどの不燃物である。つまり、回収されることがなければ、自然界では分解されることなく、海底に堆積し続けることになる。ゴミには私のような高校生と関係深いペットボトルやお菓子の袋も含まれており、責任の重さを痛感している。

海底ゴミはどこで発生するのであろうか。ゴミが海で発生することは考え難いことである。瀬戸内海は閉鎖性の海底であることから、ほかの海から流れ着く可能性も低いと考えられる。海底ゴミの発生場所はなんと人が生活している陸上なのである。人間の生活圏で排出され、適切な処分をされなかったゴミは用水路や河川を通じて海へ流れて辿り着いているのである。確かに、海底ゴミには海で利用されるものはほとんどなく、人が飲食したり、陸上で使用したもののばかりである。もしかすると、私が出したお菓子の袋がゴミとして海底に堆積している可能性があると考えれば、恥ずかしい気持ちになる。これらの真実を私は海底ゴミの回収活動に取り組むまで知らなかった。知らないということが、海底ゴミを増加させている原因でもあると思う。「自分が出したゴミが海底でゴミとして堆積している。」と考える人は多くはないと思う。このペースで人が生活が続けると20年後の海はどうなっているのだろうか。きっと海は陸上の日常生活から排出されるゴミの行き着く先となり、海はゴミ箱のようにゴミで溢れていると想像することは簡単である。

海底ゴミには電化製品や自動車の部品などの大型で重量の重いゴミもある。これらのゴミは流れ着いたとは考え難く、モラルを無視した不法投棄であると考えられる。あまりにも重量があることで、網で上げることを断念したこともあった。逆にゴミの劣化が進み、細かく分解されたゴミは網の目をすり抜けてしまうことで、全てのゴミを回収できないことも事実である。そして、何よりも海底ゴミは目視できないことで回収が困難であり、海底ゴミに対する人の認知度が低くなっていることが、海底ゴミ問題が解決に向けて進まない障害になっているのである。

人間が排出した海底ゴミであるが、自然や生物にも大きな影響を及ぼしている。生物がゴミを餌と



思い込むことで誤飲してしまい命を落としたり、ゴミが海底に蓋をすることで、生物の生育場所が失われ、生態系が崩れているのである。また、ゴミから有害物質が溶け出し、海洋汚染を発生させてもいるのである。これらの影響について、海底ゴミの原因を作り出している人として、大変責任を感じている。



海底ゴミ問題を解決する為には、海底に堆積しているゴミを回収することで、海底ゴミの絶対数を減らす必要がある。ゴミは海流に乗って移動することから、漁船からの回収作業だけでは全部を回収することは不可能である。漁船での回収活動は季節や天候に大きく作用される。夏は真っ黒に日焼けしながら、冬は肌に痛い程の北風が吹く中で作業をしている。海が時化ると高浪となり、船酔いしてしまうこともある。つまり、海底ゴミを排出することは容易なことであるが、そのゴミを回収することは大変な労力が必要であり、海に対する感謝の気持ちがなければ、とうてい不可能なことである。

テレビで日本海の沿岸に多くの漂着ゴミが流れ着き、地域の住民が処分に苦慮されている様子が放送されたのを見たことある。漂着ゴミは海底ゴミと同じ海ゴミである。日本海は外洋であり、多くのゴミが漂着する。ゴミには中国語やハングル文字で書かれたゴミが多く、海ゴミが日本だけの問題ではなく、国際問題になっていることが分かる。また、海流の影響を考えると、西側から日本へ生みゴミが漂着しているのと同様に、日本から排出されたゴミが日本の東側、つまりアメリカ大陸へ流れ着いている可能性があると考えられる。世界の国々は海で繋がっていることを考えると、将来、海ゴミは世界中に広がり、自給自足の生活をする途上国にまで海ゴミが流れ着くかもしれない。世界中への海ゴミ問題の広がりを見ると大変恐ろしくなる。しかし、手を拱いている訳にはいかない。私がそんな海の未来を変えたい。そこで、私が所属している地歴部では海底ゴミの回収活動をする傍ら、海ゴミの発生を抑制する為の啓発活動に取り組んでいる。現在、海ゴミは人間の生活の中から発生し続けている。その理由は日常生活と海ゴミの発生の関係性を知らない為である。架け橋になるべく、海ゴミの原因や影響、生活において意識することなどについて多くの人に知ってもらう為に回収活動で撮影した映像や実際に海底より回収したゴミを提示して、テレビ・ラジオ・新聞などのメディアにて全国へ情報を発信している。また、中高生が集まる集会やコンクールで発表や説明を行っている。今年、教材として中高生対象のビデオや保育園生対象のかるたを制作した。全国の多くの人に海ゴミの存在を知ってもらい、原因や影響を考えてもらい、海ゴミの排出につながらない生活へと意識が変われば、海ゴミ問題の解決に向けて大きな力になると考える。

20年後、世界中の海はどうなっているのだろうか。海から人類は多くの恩恵を受けているが、それを仇で返してよいのであろうか。人間が排出したゴミの行き着く先は目の届かない海底になっているのである。海底ゴミは現在、管轄する組織もなく、解決へ向けて進んでいないが、私が海底ゴミの回収活動や啓発活動に取り組むことで、多くの人の意識を変えたい。地道な取り組みではあるが、20年後の美しい海を夢見て頑張りたい。未来の環境問題を変えるのは現在、地球に生きる私たち人類の考えや行動に責任があると考えます。

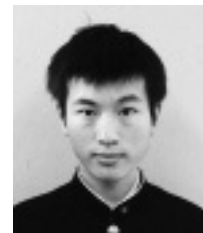
【参考文献】

- 小島あずさ・眞淳平 『海ゴミ 拡大する地球環境汚染』
中央公論新社 2007
- 眞淳平 『海はゴミ箱じゃない』 岩波書店 2008



迷う私達とツバル

鳥取県立鳥取東高等学校 2年 井上 雄二



小学生の頃、学校の図書室で、自分は一冊の本に出会った。それはツバルという島国の写真集でまだ子どもだった自分はそのきれいな海や山の写真を眺めては、ああ、こんな所が世界にはあるのか。旅行にでも行きたいなあ…、と言った呑気な事を考えていた。

そのころはあまり考えていなかったが、自分は数年後、この本をもう一度読む機会を得た。しかし、その時は読む理由が、単に写真を眺めていた小学生のころとは異なっていた。というのも、自分はその時、中学生になっていて総合学習の時間にクラスメンバーと班を作り「環境問題について」というテーマを基に研究発表会たるものに取り組んでいたのである。その時の参考資料としてその本を再び読むことになったのだ。

何故か。実はその本は単に美しい南国の自然風景を読者に伝えることを目的とした本ではなかったのだ。その本の本旨は環境問題の深刻さを読者に伝えることにあったのである。

そういえば小学生の頃、自分はその本の説明文の所はあまり読まなかった。ついでに言うと本の最後のほうのページの写真もあまり見なかった。なんだか最後の方のページは、大してきれいな写真が無かったのだ。しかし研究発表会をする時には、むしろ、そのページの方を中心にその本を読んだ。そこに写った風景は紛れもなく海面に沈みかけている島国の悲惨な光景に他ならなかったのだ。

海面上昇という事実を知った上でツバルの写真を改めて見た時、その風景は最早360度どこを見渡しても平和な南の島国のイメージと大きくかけ離れており軽い衝撃さえ私は覚えた。

しかし結局その時も、私は他の班員と同じように簡単に地球温暖化のメカニズムや海面上昇についてまとめて他の班員と同様に発表した。その時もそれで終わってしまったのだ。

しかし、今、高校2年生になってあの時のことをもう一度考え直してみると、やはり、きれいな南の島国とそこに混在している海面上昇というリアルは強烈だった。

海面上昇は周知の通り様々な被害を及ぼす。塩害による作物の損害、居住可能面積の縮小、そして何よりも島全体の水没。ツバルは今危機的状況にあることはだれ一人として疑わないだろう。

ここで一般には「ツバルを守ろう」とか「海面上昇を抑えようとか」といった意見が山ほど出てくる。確かにその考え方は否定しない。自分の考えもこれに大筋沿ったものだ。

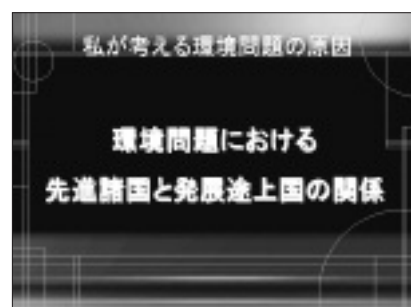
しかし、私はここで改めて一つ考えたい。

「この問題の首謀者はだれなのか」ということである。

勿論、その対象は主に先進諸国が大きく占めることになるのだが、私はそれでは不十分だと感じるのだ。

もっと厳密に言えば、そこには先進諸国におけるマジョリティー、そしてそこから生まれる意識構造が大きく関わっている様に見えるのだ。

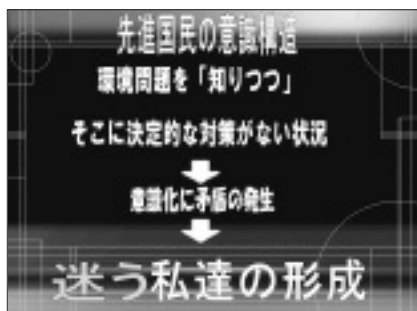
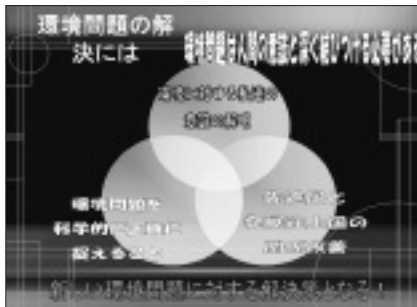
要は先進諸国と島国ツバルは、丁度、帝国主義が小国を侵略するような搾取する側とされる側との関係他ならない様に私は思うのだ。



現にツバル側には特に海面上昇に起因する要素が全くない。したがってツバルは先進諸国の手によって、人間的に比喩するならば、殺害されているのではないだろうか。

やや、表現が過剰になったが、これはただ事で済まされる問題ではないだろう。もしもツバルが沈むというならば間接的に先進諸国が、そして先進諸国の人々、自分も含めて全員がツバルを、更には同様な島国、沿岸地域などを殺害するのと何ら変わりはないと私は考える。

そして問題はこの次にある。先々まで述べた事柄は多かれ少なかれ我々の多くは「気づいて」「知覚して」いるという所だ。



ここまでテレビや新聞で環境問題が取り上げられている。今これを読んでる貴方も環境問題というキーワードを全く知らない一般人が存在するはずがないということにまず間違いなく同意してくれるだろう。

しかし、海面上昇というセクションのみを考慮するならば、地球温暖化防止に効果のある働きというものに大きな進歩は見られない。むしろ環境問題が盛んに叫ばれるようになった頃からの海面上昇の程度を考えるならば明らかに悪化していると断言さえてできる。

勿論、環境の悪化原因を考えて規制の厳罰化だけをすればよいのだが、そんな極論がまかり通るはずがない。というのが、リアルなところであろう。結局私たちは、環境問題を知覚しながらも何もできない自分たちについて何か迷っている状態に今あるのではないだろうか。

気づきながらも何もできないという我々の状態を議論したが首謀者とは案外単純にも単なる気の迷い、困惑という所に究極的には行き着くのだと思う。ならば我々はそれらを冷静に自覚した上での行動が必要だろう。迷い困惑しながらも、そんな自分達に気づかず、行動した所で効果的なものなど一体何が望めるのだろうか。

ツバルの写真は、今でも忘れられない。きれいな青空と海はまさに樂園という表現がふさわしい。そして、その本の最後の方にあった水没しかけの島々、水害に苦しむ住民もまた忘れることができない。そして、そのバックに控える「迷っている」私たちという存在。

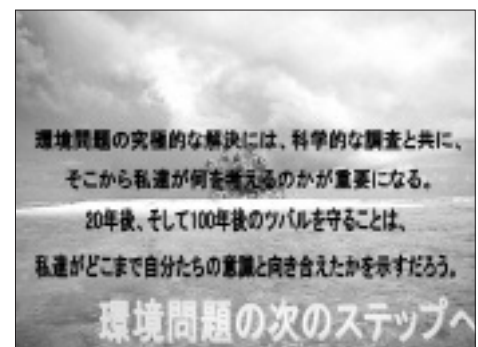
これからは、すべてを包括した上で環境に対する自己の困惑を自覚するそして行動へとシフトするというプロセスがますます重要になってくるだろうということを私は思っている。

そしてツバルが水没というシナリオを避けるということは、それこそ自分達がどこまで迷いを克服できたのかということの一つの大きな目印となるだろう。

私はいかに迷いを断ち切っていくのか模索していきたい。

【参考文献】

ツバル—海拔1メートルの島国、その自然と暮らし
国土社 遠藤 秀一 ISBN-10: 4337099026





今、私にできること

大阪府立農芸高等学校 3年 不動 緑



「楽に暮らせたなら、それで良いの。」寒いくらいクーラーをつけて寝ていた母の一言でした。これを聞いて、自己中心的だと言う人も多いはずですが。しかし、口ではそう言いつつ現実には、少し暑いとクーラーをつけ、近くの店にも車で行く人が多い世の中なのです。このような行動も母と同等、環境破壊を進める一因であると言えます。こんな偉そうなことを言う私も、2年前まではクーラーが大好きでした。しかし今は、家でクーラーがついていると消すようになりました。この前まで、環境破壊を進める一因だった私が、なぜこんなに変わったのでしょうか。それは、植物との出会いからでした。

私は、農業高校に通っています。毎日、植物の特徴や性質について学び、植物の匂い、色、形には、ひとつひとつ意味があることなどを知って、3年生になった今でも、植物の奥深さに毎日感動させられます。また、屋外の実習を通して、直接自然と触れ合うこともしてきました。特に、ひまわりを種から育てたことはとても印象に残っています。



そのひまわりがきれいに咲いたとき、花屋に売っているどんなひまわりよりも可愛いと思いました。しかし、植物はただ可愛いだけでなく、実習をしていると、心が癒されて、悩み事さえ忘れることが出来ました。気付けば、いつの間にか、植物が大好きになっていました。

しかし今、大好きな森林が、大変な速さで砂漠へと変わりつつあると、先生から聞きました。森林伐採について気になり、本で調べてみるとそこには、1990年から2000年にかけて、たった10年間で日本の面積の3倍もの森林が切られたと書かれていました。このままだと、百年後には熱帯林が無くなってしまおうとも知りました。

私は、植物たちが枯れて、砂漠になってしまった地球を想像してみました。見渡す限り砂が広がり、緑がほとんど見えません。そして、地球から植物が消滅するということは、人間も消滅することを意味します。生命の危機を感じ、初めて環境破壊の恐ろしさを感じた気がしました。中でも一番、恐ろしかったのは、森林破壊の原因が人間だということです。私は恐怖と同時に、同じ人間に対して、怒りもこみ上げてきました。



私は先日、森林伐採の写真を見ました。木が本当に泣いているかのように見えました。そう思わせるほどの悲惨さでした。なぜ、人間は森林が砂漠になるまで切ってしまったのでしょうか。それはもちろん、私たちの暮らしのためです。しかし、だからといって大好きな植物たちが悲鳴をあげているのに何もしないでいるのは、耐えられませんでした。

私に何か出来ることは無いだろうか。必死で考え、ふと、ひらめいたのです。

「園児と一緒にひまわりを育てよう。」

私は自分の経験から大切なことを思い出したのです。それは「農業を学ぶことは、環境を守ることに繋がる。」ということなのです。

農業を学ぶことで、植物の良さを知り、植物が好きになって、植物を守ろう、環境を守ろうという気持ちが生まれるはずなのです。環境が破壊されているから、クーラーを消そう、車は我慢しましょう、とはじめから押し付けるのではなく、植物を好きになってから、大好きな植物を守るために頑張ろう、という気持ちを皆に持ってもらえたら、と考えたのです。

思い立ったら嬉しくて、私はすぐに保育園へ交渉に行きました。そして現在、その保育園で「ひまわりの先生」をしています。ただひまわりを育てるだけでなく、植物そのものを好きになってほしいと考え、スケッチ大会では、じっくり植物を観察することで身近に感じたり、植物も人間と同様、「命があり、生きている」ということを知ってもらうための紙芝居も作ったりしました。でも私は内心、こんなことで本当に植物を好きになってもらえるのか正直、不安で仕方ありませんでした。

ところが、数週間が過ぎ、ひまわりが咲いた頃、園児が「次、また違う花、育てよう。」と言ってくれたのです。そのときは本当に嬉しかったです。私の気持ちが届いた瞬間だと思いました。しかし、ここで終わったら意味がありません。次は、園児の皆に人間がたくさん

植物の命を奪っていることを話すつもりです。そして、このまま森林破壊が進むと、大好きな植物たちを地球から、失ってしまうということも話したいです。ここで伝えなければいけないのは、人間が無意味に森林を切っているわけではない、ということです。私たちが毎日使っている、お箸や紙、トイレットペーパーなどを作るために植物が犠牲になっているのだということを、園児たちに知ってもらいたいのです。そう知ってもらった上で、少しでも森林破壊を防ぐために、私たちが今、植物を守るために出来ることを、皆と一緒に考えていこうと思っています。

私は、これからの未来は、皆が協力し合い、植物を守ろうと活動することが何よりも大切だと思っています。20年後、一番恐ろしい環境問題は、地球に住む人間が、本心から環境を守ろうと思わなくなるのだと思います。私は、一緒にひまわりを育ててきた子どもたちが大きくなったとき、環境保全の先頭に立つ人間になってほしいとは思っていません。ただ子どもたちに、大好きな植物を守るために自分に出来ることをしてほしいのです。自転車を使う、紙を無駄使いしないなど、どんなに小さいことでも、皆で地道に動き続けることに意味があると考えています。そんな、自ら行動してくれる子どもが増えることを願って、これからも、この活動を続けていきます。そして今は、この活動を一人で行なっているけれど、これから10人、100人、1000人と仲間を増やして行きたいと思っています。そうすれば私たちの20年後は、もっともっと輝いていくのではないのでしょうか。



農業生産物に見る20年後の環境問題

兵庫県立長田高等学校 1年 安藤 竜介



私の住んでいる地域では例年には見られないような自然現象が今年は見られ、それによって自然環境への関心をより強く持つようになった。

私は神戸市郊外に住んでいる。私の住まいであるマンションは、1990年代初頭に山を切り開いて建設された。そのため、マンションの周辺にはまだ森林が残り、そこに多くの生物が生息している。

例年の夏はセミの鳴き声によって始まる。ニイニイゼミ・ヒグラシ・アブラゼミ・クマゼミ・ミンミンゼミ・ツクツクボウシのような順番で毎年セミは鳴いている。

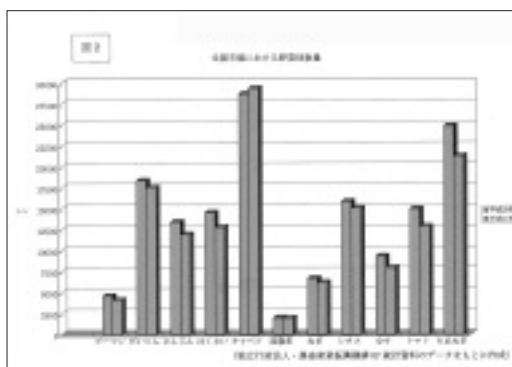
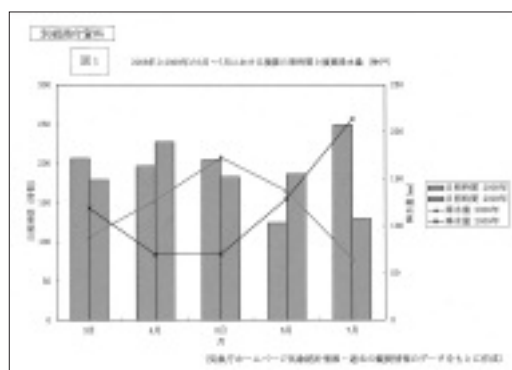
しかしながら、今年の夏は日照時間が僅少であったことや遅い梅雨明けなどによってヒグラシの鳴き声は殆ど聞かれず、夜間にニイニイゼミやツクツクボウシが長時間鳴くという例年には見られないような現象が見られた。

また、テレビでは梅雨明け宣言がなかなか報じられず野菜価格高騰のニュースが報じられていた。

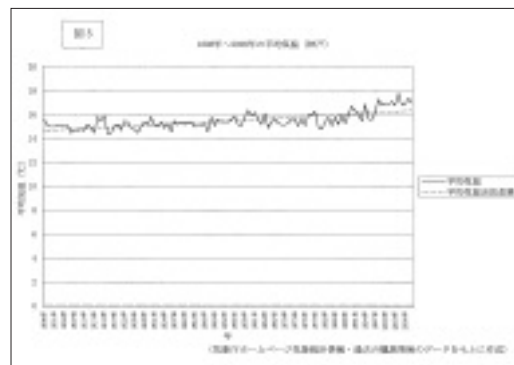
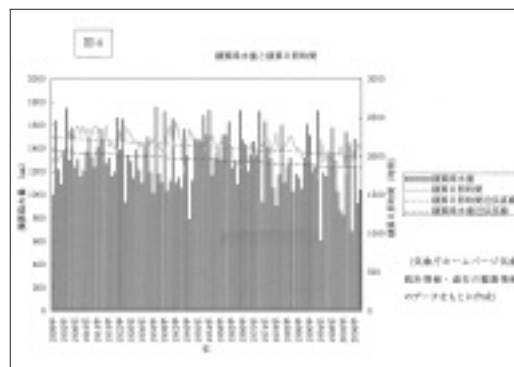
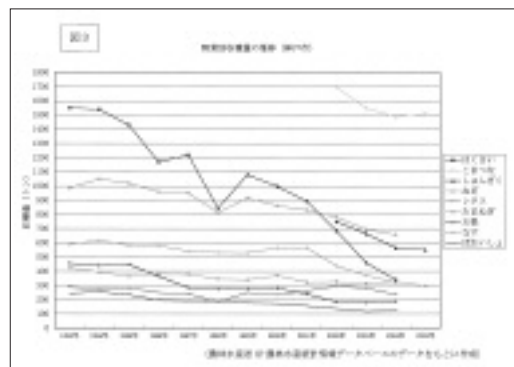
そこで、気候変動によってもたらされた農作物への影響から「20年後の環境問題」について考えてみたいと思う。

まず今年の梅雨について考えよう。今年は梅雨明けが平年に比べ全国的に遅かった。梅雨前線が長く停滞したためである。これは、「エルニーニョ現象の発生による熱帯地方の大気の上昇」、そして「亜熱帯ジェット気流の南偏・蛇行が太平洋高気圧の本州付近への張り出しを妨げたこと」が原因である。近畿地方の梅雨明けは平年では7月19日ごろであるが、今年は8月3日であった。これは、梅雨明けがはっきりしなかった1993年を除くとこれまで最も遅い（1951年以降の記録中、速報値）。しかし、私は気象台から梅雨明け発表があっても梅雨明けを実感する事は出来なかった。湿度が高く曇天の日が続いたからである。

さて、ここで昨年2008年と今年2009年の神戸市のグラフを見てみよう（図1）。日照時間に関して、6月と7月の動きが今年と去年で正反対である。昨年の7月日照時間は今年の約2倍である。また、降水量も日照時間と同じく動きが正反対で、今年は7月の降水量が多いことが分かる。7月の降水量は、「北日本でかなり多く、東日本の日本海側と西日本で多かった」（気象庁発表より引用）。降水量の増加および日照時間の減少により、農作物の生産量に影響が出る。実際、今年と去年の7・8月の全国市場における野菜の取扱数量のグラフ（図2）を見ると、ほとんどの野菜の取扱数量は去年より減少していることがわかる。しかし、キャベツ数量は増加している。



これは、今年の気候がキャベツの育成に適した環境を作りだしたためだったと考えられる。また、1993年から2005年の神戸市の野菜別の収穫量（図3）をみてみよう。全体的に収穫量は減少傾向にある。レタス・ばれいしょの収穫量に変化はないがはくさいは大きく減少し、その他の野菜も減少傾向にある。これは、農業従事者の高齢化や、需要の変化などによるものとも考えられるが気候の変化に起因するとも考えられるのではないだろうか。そこで神戸市における1898年から2008年までの年間積算降水量・年間積算日照時間（図4）・年間平均気温（図5）の推移を見てみよう。日照時間は徐々に短くなり、降水量は減少、平均気温は徐々に上昇していることがわかる。すなわち、百年間に高温で乾燥した日照時間の少ないという気象傾向にだんだんと変化してきているのである。したがって20年後、神戸は晴天の日が少なく暖かく乾燥した地域となっていると予想される。しかしながら、前述のように今年の7・8月は全国的に平年より降水量が多く、日照時間は平年より減少している。したがって、20年後は晴天の日が少なく暖かく乾燥した気候である反面、降水量の急な増加が起きることがあるといえる。このような環境下では農作物が育ちにくくなり、生産量が減少する可能性が過去の傾向から見ても極めて高い。また我が国の食料自給率はおよそ40%である。世界的気候変動によって、貿易相手国からの食料輸入量が減少すれば日本の食糧事情に大きな影響が出かねない。農作物の国内自給を推進する必要がある。



したがって、前述のような環境下で農作物を育てるには現在よりもさらに暑さに強く、日照時間が短くても育つような作物が必要になる。現在生産されている農作物の品種改良と新しい品種の導入の検討が必要だ。また、政府による国内産農作物の保護や凶作時の農家への支援も重要となってくる。そして、私たち個人は出来るだけ国内産の農作物を購入することを心がけるべきである。

今日、さまざまな環境問題がテレビや新聞で取り上げられている。環境問題は人間の生産活動によって引き起こされたものである。自然界には浄化力というものがあるが今日ではそれだけでは環境を改善できないところまでことは進んでいる。よく「自然を守る」とか「自然との共存」などという言葉を目にするが、これは大きな間違いであると思う。人間も自然の生態系の中の小さな一つの生物にしか過ぎないのである。前述のような言葉は、人間が自然界で特別な存在であるという傲りが心のどこかにあることから生まれた言葉であると思う。このような考え方が改めるべきだ。環境問題改善・解決は、自らの意識改革が必要不可欠である。そして、それは一人ひとりが自然を感じることから始まるのだと私は思う。

20年後からの救難信号

兵庫県立三木北高等学校 2年 小嶋 啓太



僕の家にはカスミサンショウウオがいる。高校の先生から、生物調査の際に保護した2匹の飼育を委託されたのだ。はじめてみる生きたサンショウウオは可愛らしかった。僕はその小さい生物を手のひらに乗せ、観察した。よく見れば見るほど、愛らしい生物だ。

昔、カスミサンショウウオを探しに田んぼや山にいったことがある。人里近くに生息する身近な生き物と図鑑には書かれているのに、生き物好きな僕にとってさえ、カスミサンショウウオは幻の生き物だった。昼も夜も、時間を忘れて探し回った。しかし、成果は得られずに終わってしまった。その次の日も、そのまた次の日も探し回ったけど見つかることはなかった。場所が悪かったのだと思い、色々なところも見て回ったが結果は同じ。それ以来、カスミサンショウウオを探そうとはしなくなった。だから、生きたカスミサンショウウオを見たときは胸が飛び出すほど感動した。逆に、なぜ昔の僕は見つけれなかったのだろうか疑問にも思った。



カスミサンショウウオを預かった僕は、すぐに家に帰って生態を調べた、文献で、インターネット上で。両生類。サンショウウオ目。サンショウウオ亜目。サンショウウオ科。あった。これだ。とすぐに目を通す。そこに書かれていたサンショウウオのページを読んで僕はようやく理解した。「止水性」と書いてあったのだ。



止水性の在来生物が住める環境は、現在の日本では急速に失われている。まず、減反政策や後継者不足により、稲作農業が衰退し、カスミサンショウウオにとってほどよい深さの水田や水路そのものが急速に失われている。それに加えて圃場整備や治水政策により、田んぼの水路や川はコンクリートで固められている。コンクリートで固められた水路は、幅を狭められ、その分深くなり、流れも速くなる。流れの強いところ、深いところではカスミサンショウウオは住めない。田んぼにも入り込めない。思い返せば、僕が探し回った田んぼの水路や川もコンクリートで固められていた。というより、固められていないところを見たことがない。だから、里山に接した田んぼの多い僕の近所でも、カスミサンショウウオは探しても見つからなかったのだ。

生息場所の変化に加えて、さらに問題がある。カスミサンショウウオの生息環境に、彼らを捕食する外来種の生物が急激に増加したことだ。アメリカザリガニなど外来種の生物にとって、彼らは絶好のエサだ。僕はこの夏、生物の生息調査のため、かつてカスミサンショウウオを探し回った田んぼの水路を再び訪れた。コンクリートで固められた水路にも、流れが緩く、落ち葉や泥が堆積したところがあった。カスミサンショウウオがいてもおかしくない環境である。しかし、そこには、アメリカザリガニがほぼ20センチおきくらいに、大量に生息していた。

外来種の侵入による危機、それは、カスミサンショウウオだけに言えることではない。たとえば、昆虫の代表格のクワガタなどはどうだろう。彼らも住処を追われ数を減らしている。クワガタの生息環境にもスマトラオオヒラタクワガタなどの外来種が侵入しているのだ。彼らは力が強く、日本のク

ワガタは簡単にやられてしまう。そのせいで、日本のクワガタは住処を追われている。また、在来種が次々に雑種となっている。今はあまり深刻化していないが、20年後に大丈夫かという、否だろう。侵食は確実に進んでいるのだ。



発端は僕たち人間だ。コンクリートの用水路。普通じゃないか。「便利」や「普通」に慣れた僕たちには何の違和感もない。しかし、そのコンクリートで整備されたせいで水の流れは速くなり、サンショウウオの住みにくい世界が生まれている。かつて地域に存在した豊かな生態系が、確実に失われていく。外来種の生物を買う。そして、うっかり逃がしてしまう、または飼いきれなくなっても殺すのはかわいそうだからとそれを無責任に放す。それが日本の在来種を追い詰めていっている。これも結局、発端は人間だ。人間がまいた種なのだ。だが、人はあまりにも気づいていない。

環境問題とはそういうものだろう。我こそが地球環境を破壊してやろう！とアニメの悪玉のような野望を抱く人間はまずいない。ただ「気づかない」「思いを巡らそうとしない」それだけだ、無関心が普通になってしまっているから。もし、人間のせいで地球が滅亡するとしたら、その原因は「悪意」よりも「無関心」なのかもしれない。この先10年、20年後にはどうなっているか。それは、どれだけの人が「気づく」かにかかっているのだ。

20年後、このままいけばカスミサンショウウオのようなデリケートな生物は絶滅の危機に瀕しているだろう。いや、すでに絶滅してしまっているかもしれない。人里に近いところに住むカスミサンショウウオは、人と自然との共生のシグナルだと僕は思う。彼らが生きられる世界は、田んぼをつくり里山を守る「人」も、その一部に組み込んだ生態系なのだ。逆に、彼らが減少したり滅亡する世界は、自然と人間が切り離された、生態系バランスの崩れた世界だ。それは、結局、人の豊かさや健康、命を奪うことにもつながっていく。

では、どうすればいいのか。最新の研究に基づいた保護はもちろん必要だが、僕は、昔に学ぶことも必要なのではないかと思う。「温故知新」これほどピッタリな言葉はない。科学技術は確かに今のほうが進んでいる。だが、その地域の特性に基づいた環境については、失われた昔の姿や生活の知恵を掘り起こしていくことが大切だ。そういった先人の知恵に学び、未来へと生かして地域に応じた共生の仕組みを考えていくことが、今後の環境問題解決には欠かせないのではないか。コンクリートで固められた水路しか見たことがない僕は、わがまちの「共生の昔」を知らない。それを教えられるのは、親をはじめとする地域の大人の人たち。そして、気づかないといけないのは、僕たちのような子どもだ。人と自然の共生する環境を再生することは、世代を超えた地域の人と人とのつながりも再生する。人と自然だけでなく、人と人もつながりあうことが、人と自然が共生できる生態系にとって必要なのだと思う。

カスミサンショウウオは今、未来からの救難信号を、体を張って発信しているのかもしれない。それを受け取るのは僕たち人間だ。今後、どれだけのことに気づき、どれだけのことを感じ、どれだけ環境問題と正面から向き合おうか。つまり、自然から聞こえる救難信号をどう受け取るかが、20年後の自分たちの豊かな世界を造るカギになるのではないのだろうか。僕は、僕たちが導く未来が多様性に富んだ自然にあふれるものだと信じたい。



どうする、人類

兵庫県立西脇工業高等学校 1年 山川 のどか



20年後の未来。私たちは今と大して変わることもなく、『当たり前』の日常を生きているだろう。地球環境も今この瞬間と変わることはなく、急速に、そして知らぬ間に、悪化の一途をたどっているだろう。

地球環境の悪化が新たに発見されれば、マスメディアは「恐いですね」「私たちも考えなければいけません」と言い、世間は「恐いなあ」「そうだなあ」と言う。そしてその気持ちはそのうち風化してしまふ。「危ないって言ってたけど大丈夫だった」。警鐘を鳴らす人もいるが、結果の悪かった占いを信じないのと同じで、真に受ける人はそう多くないだろう。

人間の活動が大きくなっていくのに耐えられなくなり、地球は「もうやめて」「これ以上環境を壊されると人間も壊れてしまふ」と言い、人間は「また自然災害が・・・」「やめてほしいな」と言う。地球の声はいったいどれだけの人に届いているのだろう。

いつか必ず、風化しきれない危機感が訪れる。それがもう目前に迫っているのか、ずっと先にあるのかは知る由もない。ただ一つ言えることは、それが『地球次第』ではなく『人間次第』、私たち次第であるということ。

身をもって知ってからでは遅すぎるのである。

約1万2千年。農耕の始まりを環境破壊の始まりとした場合の、今まで人類が環境破壊をしてきた年月である。約50億年も前から生きている地球にとってはとてもちっぽけな歳月で、痛くも痒くもなさそうに思えてしまうが、逆にとれば、何十億年かけて育まれてきたたくさんのモノがそのちっぽけな歳月によって崩壊してきているということ。最初は微笑ましかったであろう人類の活動も、今では、それこそ痛いし痒いのである。

人類はいつの間にか、すべてにおいて強大な影響力を持つようになったのだ。しかし、そのおかげで生きてきたにも関わらず、人類はその存在すら理解していないのではないだろうか。その上、良い方にその影響力をつかえるのなら願ってもないことなのだが、今の人類が地球環境に良い影響を与えている例を、残念ながら私は知らない。

『情けは人の為ならず』という言葉がある。自分の行なったことはすべて自分に返ってくるという意味だ。しかし、私が言いたいのは『悪いことをすれば自分にも悪いことが返ってくる』ということ。環境問題にも、このサイクルが見出せる。それもとんだ悪循環である。

例えば近頃よくみられる異常気象。異常気象の原因は温暖化など、地球規模の気候変動であり、地球温暖化は温室効果ガスの大量排出、それを吸収する森林の減少などが原因に挙げられる。そしてその地球温暖化の原因をつくり出しているのは紛れもない人間であり、私たちは異常気象によって多大な被害を受けている。

外来生物の問題もそうである。人間の都合で連れてこられた外来種は、これも人間の都合で捨てられて、本来の生息環境とはまったく違った場所で必死に生き抜いてきた。その結果、人間はもちろん、在来種までもが被害を受けたのである。そのため殺されるようになった外来種は、実のところ、この

問題の一番の被害者なのかもしれない。

今までも、そしてこれからも、人類は自業自得を繰り返し、自作自演の悲劇を演じ続けるだろう。

20年後の未来。人類は、最大級の絶滅危惧種である地球を救う何かを手に行っているだろうか。私は手に行っていると思う。なぜなら、私たち人類は、破壊の天才でありながら創造の天才でもあるからだ。たった20年、されど20年。ライト兄弟の飛行機からたった70年余で、人類は月の地を踏んだのである。そんな私たちが地球を救えないわけがあるだろうか。ただ一つの問題点は、私たち一人ひとりの意識である。どんなに優れたモノを持っていても、のりとはさみは使えよう。結局、一番重要なのは『個人』であると言えよう。

もっとも、単純に考えると地球を救うには、悪化の大本元である人類が地球より先に滅びることかもしれない。もしくは、食物連鎖に加わって『人間』ではなく『ヒト』になるか、今のところ空想科学上ではあるが惑星移住なども挙げられるだろう。しかし、これらは極めて無責任な選択であり、また実現し難い行動でもある。やはりこの問題は、私たち人類の手で解決しなければならない。

地球環境悪化のそもそもの原因は、文明の発達、科学の進化にあると思う。これだけ言うと、良い事のように思えるかもしれないが。

『必要は発明の母』というが、今の世界は、『発明』が『必要』を超えてしまっているのだ。本来必要としないモノを手に入れるためにはそれなりの対価を支払わなければならない、人類はそれを地球に押し付けた。そして科学の発展と地球の衰退が比例するという現状が生まれたのだ。

すべては繋がっている。違う言い方をすれば自分一人が何かをするだけで別の何かが変わられるということ。そして、出来ることなんてそこかしこにあふれている。『いつ始めるか』と、『いつ終わるか』は表裏一体。さあ、どうする。

20年後の未来。それは誰にも分からない。そのまったく分からない未来を、どれだけ明るく変えることが出来るか。

私は今、未来の私に、世界に、挑戦状を叩きつけようと思う。

Ⅲ 応募高等学校一覧

北海道

北海道天塩高等学校
とわの森三愛高等学校
北海道富良野高等学校

青森県

青森県立八戸高等学校

岩手県

岩手県立盛岡北高等学校

宮城県

宮城県佐沼高等学校
東北学院榴ヶ岡高等学校

福島県

桜の聖母学院高等学校

栃木県

栃木県立宇都宮中央女子高等学校

茨城県

江戸川学園取手高等学校

埼玉県

埼玉県立いずみ高等学校

千葉県

千葉国際高等学校

東京都

二松学舎大学附属高等学校

静岡県

静岡県立磐田農業高等学校
静岡県立沼津東高等学校
不二聖心女子学院高等学校

愛知県

愛知県立時習館高等学校

岐阜県

岐阜県立岐山高等学校

三重県

日生学園第一高等学校

奈良県

奈良女子高等学校
智辯学園高等学校
育英西高等学校

京都府

京都府立西舞鶴高等学校

大阪府

大阪女学院高等学校
大阪市立淀商業高等学校
大阪府立富田林高等学校
堺市立商業高等学校
大阪府立農芸高等学校

兵庫県

兵庫県立長田高等学校
神戸学院大学附属高等学校
兵庫県立西脇工業高等学校
兵庫県立三木北高等学校

鳥取県

鳥取県立鳥取西高等学校
鳥取県立米子工業高等学校
鳥取県立鳥取東高等学校

島根県

島根県立津和野高等学校
開星高等学校

岡山県

山陽女子高等学校
岡山学芸館高等学校

広島県

福山暁の星女子高等学校

愛媛県

済美高等学校
聖カタリナ女子高等学校

福岡県

福岡県立北筑高等学校
八女学院高等学校
福岡県立福岡魁誠高等学校
福岡県立筑紫丘高等学校

佐賀県

佐賀県立神埼高等学校

大分県

大牟田高等学校

宮崎県

宮崎県立都城西高等学校
都城工業高等専門学校
宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校
宮崎県立日南高等学校
宮崎県立宮崎大宮高等学校

長崎県

純心女子高等学校

鹿児島県

鹿児島県立屋久島高等学校

IV 過去の賞歴

※賞歴にある賞名、高等学校名、学年などは、授賞時点のものです。

第1回 全国高校生環境論文TUESカップ(平成16年)

テーマ 「地球の未来を考える」

応募 28都道府県48校 554作品

1) 最優秀賞

「水田のメタンから地球温暖化を考える」

筑波大学附属坂戸高等学校 (埼玉県) 2年 山口 麦

2) 優秀賞

「みどりの地球」

群馬県立勢多農林高等学校 3年 細野 瑞穂

「水と人との共生に向けて」

立命館高等学校(京都府) 2年 安井 裕太郎

3) 佳作

「私にできること」

兵庫県立小野高等学校 1年 仁尾 有希

「21世紀は『環境との共存』の100年」

東京学芸大学附属高等学校大泉校舎 3年 勝又 優子

「未来への扉」

群馬県立尾瀬高等学校 2年 星野 由加利

「二酸化炭素が地球環境をかえる」

立命館高等学校(京都府) 2年 四方 飛鳥

「森林を守るために」

北海道岩見沢農業高等学校 3年 斉藤 佳之

4) 学校賞

●立命館高等学校 (京都府)

●聖カタリナ女子高等学校 (愛媛県)

●神戸学院大学附属高等学校 (兵庫県)

●島根県立津和野高等学校 (島根県)

第2回 全国高校生環境論文TUESカップ(平成17年)

テーマ 「環境問題 -今私たちにできること-

応募 25都道府県54校 850作品

1) 最優秀賞

「環境を守る ～地域に伝えたい私のメッセージ～」

愛媛大学農学部附属農業高等学校 3年 菅野 宏和

2) 優秀賞

「身近な公園の中に残された生き物たち ～今治城の環境調査から考えたこと～」

愛媛県立今治南高等学校 3年 小澤 祥史

「環境教育について」

東京都立つばさ総合高等学校 3年 阪本 睦美

3) 佳作

「環境問題は利用できる」

兵庫県立小野高等学校 2年 筒井 岳広

「絶滅危惧種カスミサンショウウオの保護活動」

多々良学園高等学校(山口県) 2年 安村 遼介

「かけがえのない自然」

立命館高等学校(京都府) 2年 松井 惇史

4) 学校賞

●神戸学院大学附属高等学校 (兵庫県)

●立命館高等学校 (京都府)

●山梨県立甲府西高等学校 (山梨県)

●兵庫県立小野高等学校 (兵庫県)

5) 奨励賞

12校

第3回 全国高校生環境論文TUESカップ(平成18年)

テーマ 「環境問題 -未来へのメッセージ」

応募 25都道府県55校 1,088作品

1) 環境大賞

「『春の女神』との再会」 山形県立山形東高等学校 2年 富 樫 敬 太

2) 鳥取環境大学長賞

「ガマの環境保護能力」 高田高等学校(三重県) 1年 加 納 滉 大

3) 鳥取市長賞

「TUVALU」 鳥取県立倉吉西高等学校 1年 西 村 さおり
「今、できることを」 兵庫県立三木北高等学校 2年 水 野 花

4) 佳 作

「環境保護と自己犠牲」 鳥取県立鳥取西高等学校 2年 金 藤 三 花
「森を守る」 島根県立津和野高等学校 3年 廣 兼 純一郎
「環境問題～未来へのメッセージ～」 愛媛大学農学部附属農業高等学校 1年 谷 田 任

5) 学 校 賞

●島根県立津和野高等学校 (島根県) ●済美高等学校 (愛媛県)
●都城工業高等専門学校 (宮崎県)

6) 奨 励 賞 13校

第4回 全国高校生環境論文TUESカップ(平成19年)

テーマ 「環境問題 ～世界・日本・私たちの暮らし～」

応募 22都道府県45校 1,352作品

1) 環境大賞

「綾瀬川での取り組み」 東京都立農芸高等学校 3年 石 倉 卓 也

2) 鳥取県知事賞

「地球環境を改善したい!! 豆腐製造の新技术 おから溶解処理方法の発見」
長崎県立島原農業高等学校 2年 園 田 加菜美

3) 鳥取市長賞

「私の身近な水環境をより豊かなものに ～地元から考える～」
神戸学院大学附属高等学校 1年 赤 松 優 子

4) 新日本海新聞社賞

「犯人」 鳥取県立鳥取東高等学校 2年 西 尾 昌希子

5) 佳 作

「消えゆくホタル」 長野県富士見高等学校 2年 山 本 高 大
「消える星と光害」 鳥取県立鳥取東高等学校 2年 岡 室 那 弥
「経験から学ぶこと」 神戸山手女子高等学校 3年 原 田 映 里

6) 学 校 賞

●都城工業高等専門学校 (宮崎県) ●鳥取県立鳥取東高等学校 (鳥取県)
●徳島県立池田高等学校 (徳島県)

7) 奨 励 賞 10校

第5回 全国高校生環境論文TUESカップ(平成20年)

テーマ 「水と私たち」

応募 22都道府県39校 1,423作品

1) 環境大賞

「川と共に生きる」 島根県立津和野高等学校 1年 宮本 彩

2) 鳥取県知事賞

「環境戦士 エコ・イエローは考える」 兵庫県立三木北高等学校 1年 五十川 諒

3) 鳥取市長賞

「湖山池の環境問題」 鳥取県立鳥取東高等学校 2年 森 文香

4) 新日本海新聞社賞

「まもりたい」 徳島県立池田高等学校 2年 中上 祥恵

5) 佳作

「自らの変化は水の変化」 富山県立高岡高等学校 1年 土橋 千咲
「地球という星に生まれて」 鳥取県立米子東高等学校 2年 伊藤 千恵子
「水とわたしたち人間」 京都府立洛北高等学校 1年 中野 さゆり

5) 学校賞

- 愛知県立岡崎商業高等学校 (愛知県)
- 鳥取県立鳥取西高等学校 (鳥取県)
- 鳥取県立鳥取東高等学校 (鳥取県)

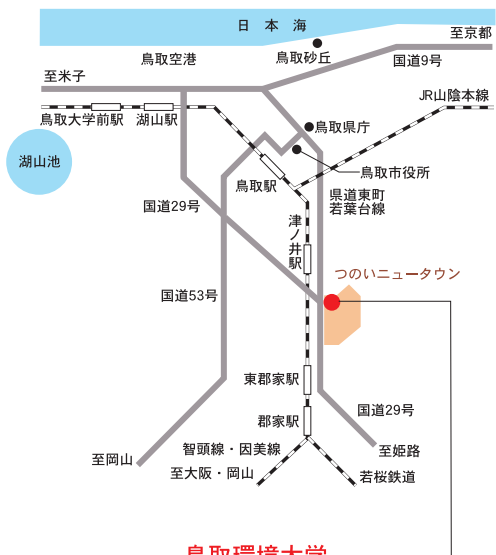
6) 奨励賞 13校

第6回全国高校生環境論文 TUESカップ論文報告書 「20年後の環境問題—どうなる、どうする—」

2009年11月発行

発行 鳥取環境大学
鳥取市若葉台北1丁目1番1号
TEL 0857-38-6704 (企画広報課)
印刷 中央印刷株式会社
鳥取市南栄町34
TEL 0857-53-2221

TOTTORI UNIVERSITY OF ENVIRONMENTAL STUDIES



鳥取環境大学

環境情報学部 環境政策経営学科/環境マネジメント学科
建築・環境デザイン学科/情報システム学科

[PC] <http://www.kankyo-u.ac.jp/>
[携帯] <http://www.kankyo-u.ac.jp/mb> →

TEL 0857-38-6704 (企画広報課)

Fax. 0857-38-6709
E-mail kikaku@kankyo-u.ac.jp
〒689-1111 鳥取県鳥取市若葉台北1丁目1番1号

鳥取環境大学
キャンパスへは
●津ノ井駅から徒歩約20分
●鳥取駅からバスで約20分
●鳥取空港から車で約30分